



Title	移行期早期の新人看護師たちに生じた看護実践者としての変容
Author(s)	池口, 佳子
Citation	臨床実践の現象学. 2024, 6(4), p. 48-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

移行期早期の新人看護師たちに生じた看護実践者としての変容

Experience of Novice Nurses Transforming into Practicing Nurses in the Early Transitional Period

一般社団法人オリーブ・東京都立大学大学院客員研究員

池口 佳子

I 研究の背景

現在、就業している看護師は約131万人(2022年度)にのぼり、毎年約5万人の新人看護師が誕生している。看護基礎教育では、実習で臨床現場に入り病いを患いながら生活する人に看護を実践するということを学修し、看護実践者としてのアイデンティティが形成される(Benner, 2001/2005, p. 130)。そして看護師国家試験に合格すると再び臨床に戻り看護を実践するという経験を重ねながら、看護実践者としての変容が生じ成長していくことが期待されている。

新人看護師の経験に関する先行研究では、学び・技術・ストレス・リアリティショック・移行期教育などの経験が多数報告されている。就職後1～3カ月という移行期早期の新人看護師が経験する **Transition Shock** は、関係性を失うこと・知識を疑うこと・多くの責任による混乱・沢山の役割に対するオリエンテーションの軽視といった要因から生じるとされるが (Duchscher, 2009)、実際に臨床に適応できずに1年未満で離職してしまう看護師の離職率は近年10.2%と高い状態が続いている(日本看護協会, 2024)。しかしながら就職後1年未満の新人看護師は、実践能力の不足や実践に対する不安、組織内でのコミュニケーションについての困難を感じている(田中, 2022)一方、実習での学びと臨床でのギャップを感じてはいるが専門職としての自覚や成長も感じている(谷口, 山田, 内藤, 内海, 任, 2014)との報告もある。また、新人看護師は原理原則に則り個別的な看護実践が困難である(Benner, 2001/2005)とされてきたが、移行期早期であっても看護の個別性と円滑な業務遂行が可能である(森, 亀岡, 定廣, 舟島, 2004)との指摘もある。このことから新人看護師は臨床で看護実践者として多様な経験をしていると推察されるが、前述したように新人看護師の不安や困難そして実践そのものに焦点が当てられた研究が多い。また、多くの研究において研究対象が入職後半年以降に設定されており(田中, 2022; 橋本, 2018; 谷口ら, 2014; 大江, 塚原, 長山, 西村, 2014)移行期早期の新人看護師の経験については明らかになっていない。移行期早期の新人看護師を支援するためには、当事者が経験していることを明らかにする必要があるのではないだろうか。

筆者は博士研究において、看護学生が実習を終えた大学4年次の9月から新人看護師となった就職後2カ月半後の翌年6月中旬までの約9か月半に亘り、実習経験が捉え直されていく時に当事者にとってどのような意味を帯びていったのかという経験の捉え直しと、それが看護師としての態度(振る舞い)にどのような影響をもたらしたのかということを当事者の経験の語りから探究した。この数値化できない看護師としての態度形成という事象を探究するために、教育者である研究者の視点を棚上げし当事者の生きられた経験に接近する現象学的研究方法を用いた。個人とグループ面接を3回(4年次秋・卒業時・就職後2カ月半)実施した結果、個人面接では4年間の実習を長期的な視点で振り返り、各々の脈絡にお

いて看護に対する考え方や自らの関心がどう変わっていったのかを了解していく語りが聴かれた(池口, 2023)。一方、グループ面接では個人面接とは異なるお互いの語りに触発された応答により、研究参加者に共通した経験が浮かび上がった。特に看護師となった3回目のグループ面接では、実習で経験した臨床に看護師として戻ったときに看護実践者として主体的に実践できないことや看護実践が業務のように感じられてしまうというジレンマが語られた。さらに看護実践を振り返ったときに、実習や入職直後と比較したときに看護を実践するときの関心の向かい方の変化や、患者やチームの看護を先取りできるようになったという経験が語られた。本稿ではこの移行期早期の新人看護師が経験した看護を実践するときの変化に着目し、彼らに生じた看護実践者としての変容について現象学的に記述する。そのことから移行期教育についての示唆を得ることが期待できると考えた。

Ⅱ 研究目的

移行期早期の新人看護師たちが経験したジレンマと、彼らに生じた看護実践者としての変容について現象学的に記述する。

Ⅲ 研究方法

1. 現象学的研究方法

2. 研究参加者：研究者が教育背景を熟知している関東近郊の看護系大学卒業生 6 名

3. データ収集：グループ面接という仲間との対話から「了解可能で共有可能な構造を取り出すことを目的」(松葉・西村, 2014, p. 63)とし、看護師として就職した 2 ヶ月半後に非構造化面接を実施した(96 分)。インタビューは、実習での経験しかなかった彼らに新人看護師として看護を実践するということがどう経験されたのかを語ってもらうために、「実習のことを思い出すことはありますか」という問いかけから始め、自由に語ってもらった。また、インタビュー中の様子も記録した。

4. データの解釈

データからトランスクリプトを作成し、インタビュー中の様子も併せて記録した。トランスクリプトを何度も読み返し、新人看護師が語った看護実践について、その時に感じたジレンマや関心の向かい方、意図したことなどについて、語り方の特徴や文脈、変化に着目しながら解釈した。そしてそれらの語りが仲間との対話においてどのように生まれたのかを全体の語りとの関連を検討し、語りが生まれた文脈から彼らの視点に接近して解釈した。特に、データとなる語りの特徴から、看護を実践するときの関心の向かい方や彼らのパースペクティブが捉えたことの方から、看護実践者としての変容がどのように生じたのかについて解釈した。また、解釈の妥当性や信頼性を高めるために、現象学的研究者(哲学者・心理学者・看護学者など)と分析の妥当性について繰り返し検討を行った。

5. 倫理的配慮

研究者の所属する機関の倫理審査委員会の承認(承認番号16080)後、研究協力施設の研究倫理審査委員会の承認(承認番号17-A031)を得た。本研究においては学生が対象となるため、教員である研究者による強制力を排除する目的で、研究参加候補者の単位認定がすべて終了した時点で、自由意思で参加できるように掲示物を用いた。さらにリクルートの

際には、研究参加候補者には面識のない教員ではない研究協力者が研究窓口となり、研究者が直接関わらないように配慮した。その上で自主的に研究参加を希望した者に対して口頭および文書による説明を行い、同意を得られたものを研究参加者とした。また途中辞退も可能であることを予め説明したが、グループ面接後の辞退はデータの特性上困難であることを伝えた。

IV 結 果

1. 研究参加者：A看護系大学で看護を学んだ同級生、Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん、Fさんの6名。全員20代(Dさんのみ男性)。就職先は、AさんとBさんは大学病院の消化器外科病棟、Cさんは専門病院の乳腺外科・血液内科病棟、Dさんは訪問看護ステーション、Eさんは大学病院の手術室、Fさんは専門病院の神経難病疾患急性期病棟であった。

2. データの表記：斜字明朝とし、末尾にデータからの抜粋箇所をトランスクリプトの行数で示した。語りのまとまりには、内容を端的に表わすデータから見出しをつけた。また、解釈はゴシック体にて記述した。

3. 結果と解釈

就職後2ヶ月半後に実施したグループ面接(96分)では、実習を思い出すことがありますかという問い掛けからインタビューを始めた。その問い掛けに研究参加者に共通していたこととして、実習で経験した臨床に看護師として就職し看護を実践したときに感じたジレンマが語られた。その語られた場面から、みていくこととする。

1) もう学生じゃないんだから

卒業から2ヶ月半ぶりにみんなと再会した華やいだ雰囲気は、研究者の**実習のことを思い出すことはありますか**という言葉に一瞬静まりかえった。そこで**学生のときの臨床と今体験している臨床は違いますか**と問い掛けると、みんなが口々に**全然違う**と即答した【4】。Bさんが**そもそもやるのが全然。学生の時は点滴とか繋いじゃいけないみたいだった、特に急性期とかはシャドーイングみたいな感じで。ケアもちょっとやるみたい**な【6-8】と語った。さらに手術室勤務となったEさんが、**厳しさが全然**【38】と言い、当日急に使用することになった初めて使用する器具について、執刀医から初めてでも分かるよねと言われたエピソードを語った。

Eさん：結構、そういう感じの人とか。もちろん、先輩ナースとかでも、もちろん、勉強してきてるよね、もちろん、勉強はしてきてるんですけど、ここが分からないですって言いにくいときとかあって。もちろん、そういうときにどこが分からなかったとか、保護的に教育的に関わってくれる人もいれば、仕事でしょ、みたいな。仕事だから分かるよね、いや学生じゃないんだからみたいな感じのときはあります。もちろん、それは正論なんですけど。あれえ、私たちも頑張っているよね。

みんな：あっ～

Cさん：よく、学生じゃないんだからって、結構言われるよね。なんか、一回教わったケアは、次はじゃあ自分でやってみてって言われたときに、声掛けとか全部主体的にやらないと。もっと主体的にやらないと、もう学生じゃないんだから、自分で患者さんをもっているんだから、ちゃんとやってっていうのは言われる。

Fさん：同じこと言われた。

【61-76】

新人看護師になった彼らには、資格がないことでやれることが制限された実習での看護実践とは対照的に、看護専門職者としての主体的な看護実践が求められていた。「正論なんですけど」と語る彼らは、学生のと看とは立場が異なることは十分認識している。看護師としてどう振る舞ったらよいかを先輩ナースの看護実践を見て理解することと、実際に看護実践の主体者として振る舞えるようになっていくことは、彼らにとって異なることとして経験されていた。彼らは、「学生じゃないんだから」という言葉に自分がまだ看護師として動けていないことを実感せざるを得ない。実習のときと今の臨床での違いについての問い掛けは、看護師になり初めて経験することを学びながら頑張っているにも拘わらず、周囲から求められることに対して上手く応えられないことで生じている彼らのジレンマを、施設を越えて浮かび上がらせていった。そして彼らの話題は具体的な看護実践へと移っていった。続いて、実習で培った思考プロセスと求められる看護実践との違いが語られた場面を見ていく。

2) 学生の頃はそんなこと全然考えてなかった

訪問看護師になったDさんは、先輩看護師から実習で培った思考プロセスは看護師になってからも変わらないと言われた【394-400】と語り、患者の観察項目を考える難しさについて語った。

Dさん：なんか、感染のリスクっていうと何のリスクって、褥瘡からもくるし、膀胱留置カテーテルからもくるし、あと、脳梗塞から、ちょっと呼吸機能が抑制がかかっちゃって、そこから誤嚥性肺炎からもくるなあととか、それでそういうリスクあります。じゃあ、それを防ぐためには何を見る、じゃあ、それを見るためにはどう見るって。それからがすごく大変で。

研究者：広がるからね。

Cさん：しかもそれがあつた時に、どう対処するのかって難しくない？

Dさん：難しい、難しい。

Cさん：取り敢えず、先生に連絡しますとかしか、最初分らなかったけれども。何見るとか、今の出てる指示でどういう薬を使ってもいいとか、どういう体位にするとか、なんかそういう看護師でもできるっていうことが、最初は全然思いつかなくて。学生の頃はそんなことは全然考えてなかった。

研究者：考えてなかった。知識としてあれ（看護過程）を書くみたい。整理。

Aさん：確かに。

Dさん：お薬の調整とかもあつたりとか、じゃあこの薬は飛ばしましょうとか。

Cさん：変えるとかね。

Dさん：そうそうああいうのがね。止めていいのかなあとか。【455-474】

先輩との会話を再現しながらDさんは、過去の状態から今の患者に感染が「くる」かどうか思考過程を遡っていった。その「くる」には、過去から今に繋がる患者の病いがもたらすいくつかの不確かな時間が含まれている。さらに生じていない未来の時間に起こりうる可能性がある合併症などのリスクを予防したり異常を先取りするために、患者の状態を捉えることは、経験が少ないDさんには難しく感じられている。

その大変さをCさんが引き継ぎ、その不確かな未来が現実となったときの対応の難しさについてみんなに共感を求めた。さらにCさんの言葉に思わず研究者が発した言葉に、「お薬の調整とかもあったり」とDさんが応じたことからCさんの感じている対応の難しさをDさんも同様に感じていることが分かる。患者に生じるリスクについては学習しても、それが生じたときの具体的な対応までは学生のときは考えられていなかったことに、自らが実践者になって初めて気づいたことになる。

しかしながら医師の包括指示下で行なう薬の調整や体位の調整も、今では「看護師でもできる」こととしてCさんに認識されている。「じゃあこの薬は飛ばしましょう」という臨床での会話を再現しながら語る彼らは、周囲の人とのやり取りや「じゃあ」に至る判断の根拠から、休薬や薬の変更といった対処の仕方を一つ一つ学び取ってきたことが分かる。「最初は全然思いつかなくて」というCさんの語りは、この2ヶ月半のあいだに受け持った患者への看護を先輩ナースや医師に相談しながら実践してきた経験値によって、患者に何かが生じたときの「看護師でもできる」対応を過去の類似した経験から思いつくようになるという変化が生じたことを表していた。そしてFさんが具体的なケースを語るという形で応答した。

Fさん：結構、量が出ない患者さんとか。それまではちゃんと1800とかも出てたのに。

Bさん：1800は結構出てる。

Fさん：そう、結構出てる。まあそれまで、点滴入っていて、インが結構あったから、アウトも結構あったんだけど、点滴前日に止めてて確か。

みんな：あっ～

Fさん：前日に止めててつなげた瞬間に、結局一日1000出てないっていう状態になって。

Dさん：まあでも。

Bさん：危ない。

Fさん：その日の日勤を看てたんだけど、その確か昼ぐらいまで見てた時に、やっぱり尿量少ないってなった時に、指導者さんに、じゃあどうするみたいな感じになって。＜中略＞ やっぱりなんか、実習の時とかでも、いろいろ教えてもらっていたけれども、もっとなんかこう、その先輩達がなんか経験としてこれ見た方がいいとか、なんか後日に別の指導者さんとかについてもらった時に、それプラスにこことかも見るといいよとかも教えてくれて。なんか多分その人その人で基本的に見てるところはあるけれども、

プラスここも見ておいた方がいいってところとかが色々あって。＜中略＞だから、そういうのもちゃんと参考にして、見るものとか考えていくのが必要だなあとか。
【475-506】

「量が出ない」「1800」というFさんの語りに、Bさんが即座に「結構出てる」と応答した。主語がなくても数値を聞いただけでそれが患者の尿量を示し、さらにそれが過去の患者の循環動態や輸液や薬の影響を反映していることが彼らに了解されている。それは前述した感染のリスクとは異なり、病名が分からなくても in/out や数値を聞いただけで「危ない」と思わず言葉が出てしまうぐらい身体の応答をとまっていた。彼らの会話は、職場が違って、臨床で日々患者の状態を把握するために行う時間軸における尿量の変化から身体の循環動態をアセスメントし、未来の時間において患者の状態が急変する可能性があるかどうかの判断を瞬時に彼らができるようになっていて、ことを表していた。

さらにFさんは自分の具体的な経験を話すという応答の仕方でも共感を示していく。Fさんの視点は、「もっとなんかこう、これ見た方がいい」「こことかも見るといいよ」と導いてくれる複数の先輩ナースの経験値を含んだ視点に導かれて、広がりをもったものに変化しつつある。しかしながら個々の先輩ナースの経験値による差異はFさん自身の患者を捉える視点を問い直させ、自ら「見るものとか考えて」いかなくてもという能動的な行為を促す契機となっていた。

続いて彼らにとって、看護を実践するということがどう経験されていったのかが語られた場面をみていく。彼らは、4 年次秋と卒業時の 2 回のグループ面接において実習での経験を語り合う中で何がケアであり何が業務であるのかという問いを自分たちで立てて話し合ってきた。それは看護師になっていく過程において、自分たちの看護実践が患者のケアになっているのかを確かめ合う語りであった。今回のグループ面接でも、彼らの会話は自然と自分たちの看護実践がケアであるのか業務であるのかを問う語りへと移っていった。

3) ケアであり、業務でありみたいな感じ

Dさんは、「先輩看護師が看護学生時代になんでケアするのかを問われ、今日は金曜日で本来のスケジュールが入浴の日だから入浴しますと返答したところ、それは業務だよ」と言われたという、先輩から聴いたエピソードを語った 【1268】。

Bさん：私は逆に、それは学生のときの方が言われたかも知れない。なんかこの人の清潔ケアは何で必要なのか、今は一昨日その人はシャワー入っているから今日はシャワー浴びる日だね。じゃあ、どうやってシャワー入るみたいな感じの。理由まではもう分かっているけど当然みたいな。なんか分かんないけど。特に訊かれたことはないけど。まあ、確かに分かっているけど当然だし。なんかねえっていう。まあ、やるのも当然っていう感じで。

Aさん：うっん。

Bさん：なんか業務としてやり、ケアであり、業務でありみたいな感じが。感じを感じている。

Aさん：確かに、病棟の雰囲気かなあ。

Bさん：かなあ、雰囲気はある。

研究者：じゃあ、実習でやってたのは、看護だった？

Dさん：って言われたら、そんな。

Aさん：気持ち的な面ではやっぱり、看護してた感じが。

Eさん：実習の時の方が、なんか。人と人との。

Dさん：夜更かししたのも当日はあの人に迷惑かけないように。それで結構やっていたし。

Eさん：何かしてあげたいって、気持ちがあって。

みんな：そうそう、あったよね。

【1269-1314】

看護実践におけるケアと業務についての問いに対する答えを探そうと、彼らは看護実践を行なっているときの今と実習のときとの感覚の違いを辿っていった。病棟で予め決められたシャワー浴はケアであるにも拘わらず、同時に業務をこなしているような感覚もBさんにもたらしていた。同じ外科病棟に勤務するAさんとBさんの語った「病棟の雰囲気」は、病棟のルールの方から患者のシャワー浴の実施日が決められ、それに沿ってやるのが当然とされることから生じていた。患者の希望や身体状況をアセスメントしながら実施されるはずのシャワー浴が、時間で管理されるシャワー室の状況や周術期の感染予防の観点から今日やるべき清潔ケアとして病棟の予定として組み込まれてしまう。そのためケアをする彼らには、本来のケアとしての感覚とともに、やらねばならない業務のような感覚もたらされている。しかし彼らが語ったケアと業務の違いは、「感じ」という曖昧な表現で語られたことから、それらを区別する判断基準は彼らの中でも明確にはなっていないことが分かる。彼らにとって看護とは、患者ではあるが他の誰かではないこの「人」に「何かしてあげたい」という気持ちから生まれたケアとして実習で経験されていた。「あの人」という特定の相手を気遣うことから生まれた看護実践と、病棟のルールから生まれた看護実践では全く異なる感覚を彼らにもたらしていたことになる。彼らの会話の続きをみていく。

研究者：なるほどね、じゃあ、今はそれもあるけど。もちろんあるけど。

Aさん：もちろんあるけど、それ以外に追われるものが。人数だったり、輸液作成だったり。

研究者：ああ。

Aさん：なんかこう、いろんな処置だったり。なんていうの、記録ではないんだけど。

Bさん：記録ではない。

Aさん：まあ、そういう、入院のテンプレートだあ、なんだっていう、そういう手続きチェックなところ。＜中略＞

Bさん：取り敢えず業務だから、あっ入院さん来た。あっ同意書、バイタルみたいな感じで。

Aさん：同じ。

Bさん：項目挙げてって、これが必要だってなったらやるって感じで。

研究者：確かに、全部に気持ちを入れてたらパンクしちゃうものね。毎日ね。

Bさん：もたない。

研究者：う～ん。

Bさん：でも、やっぱりなんか初めましてって言う患者さんに対しては、なんかなんだろなあ、ケア、なんだろ。その話すことだけでもケアではないけど。なんか、なんだろ。その人を知ろうとして関わる訳だから、そこなんだろ、そこまでは、そこを業務的にはやりたくないっていう風に思ってます。なんか、同意書見せてくださいって言うのも、その人にとってのもっともいい言い方があるし、例えばなんか持ってきてないっていう時とか。もうその人を不安にさせないように何か言ったりとか対応するのも、やっぱりそれは看護師だから。そういうこと。【1315-1357】

「追われている」と語るAさんやBさんにとって、仕事を段取るための時間の先取りが難しいことが分かる。そのために彼らの関心は、受け持っている複数の患者や入院患者の受け入れや手術のためのチェックリストの確認、輸液作成などを時間通りに終わらせることへと向かわされてしまい、実践する彼らには時間でこなさなければならない業務のような感覚がもたらされていた。しかし入院患者の手術の同意書を確認するという手続きとしての行為を仲間と振り返ったときに、その人を知ろうと患者に関心を向かわせることで自らの言動が患者に与える影響を先取りし、患者にとってもっともよい仕方に関わろうとしていたことにBさんは気づかされていった。しかしながら、「取り敢えず業務だから」と語っていたBさんにとって、その振る舞いの意図は明確には意識されてはいなかったのだろう。Bさんは仲間と業務について語る中で、自らの患者への振る舞いをケアとして意味づけ、そう振る舞う存在を看護師として位置づけたことになる。

入職して2ヶ月半の時点において、看護実践として臨床で必要なことを業務としても行いながら、振り返ったときにその看護実践において確かにBさんは看護師として振る舞い患者をケアしていた。そしてBさんの語りにCさんが応答した場面をみていくこととする。

4) チームや次の日の患者さんを考えるようになった

Bさんの語りに触発されたCさんが、チームの一員として看護を考えるようになったという自らの変化について語った続きの場面である。

Cさん：入院の人とか来た時に、入院中に気をつけた方がいいこととか、なんか例えばどこにしびれがあるとか、薬・向精神薬飲んでるとか、なんかそういうことを予測して、今後情報が必要になることを取っておくとか、その病棟でちゃんと看護ができるように、チームで看護が看れるようにできるようにとかっていうのも、考えるようになった。

みんな：う～ん

研究者：その場で自分がこれで必要だと思う情報だけじゃなくて、その後も考えて情報をとったり、う～ん、先を見越す、って動くようになった？

みんな：うん。

研究者：個人インタビューでも、申し送りの時にこういうことを伝えておいたら、もしかしたら、こういうことをやって準備しておいたら、次の勤務の人が気持ちよく働けるとか、そういう見越して申し送りをするようになったという話があったんだけど、訪問看護とかも先を見越してなんか色々なことをやったり。

Dさん：ああ。

研究者：オペもそうだったり。

Eさん：点滴の針、何ゲージいつ入れました。病棟の人が分かりやすいように書いてたり。

Fさん：そう言うのって、聴いてないと困る。

Eさん：そう、細かい、細かいんですけど。

【1360-1381】

「チームで看護が看れるように」「できるように」と語られたことから、Cさんは入院患者を受け入れるときにチェックリストに沿って確認すべきことを訊いていくだけではなく、しびれや抗精神薬などの情報を患者から聞き取りながら重要度を見極め、今後入院生活や治療を受ける上で起こりうるリスクがあることを先取りし、チームで24時間看護をするために必要なことは何かを考えながら情報を収集できるようになったということなのだろう。「考えるようになった」ことで、それ以前の自分との差異を成長としてCさんは認識したことになる。研究者は直前に行った個人面接において、働く病院や部署が異なってもこの2ヶ月半というあいだに彼らの実践が変化しつつあることを了解していた。それぞれが考え込むような「うーん」という応答に対し研究者が各々の実践で生じた変化を想起させるような問い掛けをすると、彼らは応答していった。

彼らの語りは、患者を受け持つ看護師が行なうチームの看護を先取り出来るようになるという変化が彼らに生じたことを表していた。それはそれぞれの看護実践をチームの看護として理解しながら行なうことを可能にする看護実践者としての変容が、彼らに生じていることを示している。しかしながらその変容は、明確に彼らに意識されていた訳ではなく、実践を振り返る中でやっとできるようになった実践可能なこととして認識されていた。そしてFさんがそんなみんなの変化を代弁するように、この2ヶ月半の自らの変化を振り返って語っていった。

Fさん：なんかやっぱり、実習の時とか、入職してすぐの時とか、毎日その日を終わることが目標。

研究者：そうだよね。

Fさん：学生の時は、帰って記録してって感じで。必死こいてその日を終わることが目標だったけど、なんか、最近はまだちょっとずつではあるけど、その次の日は患者さん、次の日じゃない、じゃあ夜勤帯どうするってこれ終わしておこうとか、次の日のためにこうだとか、昨日までの排便がなかったら、今日は下剤入れとかかあとかみたいなの。入れとかかあみたいなの感じの。(笑いながら)

【1395-1405】

「なんかやっぱり」と自らに確認するように、実習や入職した直後は「その日を終わることが目標だった」とFさんは振り返った。そのときのFさんの関心は、実習や仕事を「終わる」ために看護を行う自分自身に向かっていったことになる。しかし今のFさんの関心は「ちょっとずつではあるけど」「その次の日」「じゃあ夜勤帯どうする」と、少し先の時間の患者を気遣うように変化していた。この2ヶ月半のあいだに自らに生じた看護実践者としての変化をFさんは「みたいな」「感じ」と照れくさそうに曖昧な感覚で語った。

新人看護師として主体的に看護実践を行えていないジレンマから始まった仲間との語りは、日々行っている業務のようにも感じられる看護実践において、少し先の患者やその患者を受け持つ看護師の看護を先取りし気遣えるようになった彼らの変容を浮かび上がらせていった。それは見方を変えると、この2ヶ月半のあいだに生じた看護師としての成長である。彼らは看護実践者として、チームの看護を先取りしながらその都度の状況に応じた意図をもった能動的な看護実践を行えるように少しずつ変化しつつある。しかしそれは実践している彼ら自身にも明確には自覚されてはおらず、仲間と自分たちの看護実践を振り返ったときに浮かび上がり、了解されたことになる。

V 考 察

移行期早期の新人看護師が仲間と看護実践における経験を振り返ったときに語られた変化から、新人看護師の看護実践者としての変容について論じていくこととする。はじめに、臨床に看護師として入ったときに彼らが感じたジレンマについて考察する。続いて、看護実践を振り返ったときに看護チームの看護を先取りするようになるという変化をもたらした、移行期早期の新人看護師に生じた看護実践者としての変容について考察し、移行期教育への示唆を述べる。

1. 移行期早期の新人看護師が感じたジレンマと存在了解

本研究の新人看護師たちも、移行期早期に生じるTransition Shock (Duchscher, 2008)を感じていた。頑張っているにも拘わらず、周囲の人の言葉に主体的に行動できていない自分を認識せざるを得ず、彼らはジレンマを感じていた。資格をもたず看護を学ぶ学生と仕事として看護を実践する看護師では、臨床で求められる役割が異なることは彼らも了承していた。看護実践の知識や技術を覚えることと、看護師として主体的に実践できるようになることは異なることとして、彼らに経験されていた。

また、彼らは看護実践者として、看護を仕事として行なう際にケアであり業務のような感覚を感じていた。彼らの語りは、新人看護師がケアか業務かを自らの感覚から判断していることを表わしていた。複数の患者を受け持ちながら入院患者を受け入れ、手続きのような書類を処理しながら輸液を作成する中で、思うように時間管理ができない彼らには時間に追われているような焦燥感がもたらされていた。その焦燥感は、彼らの関心を仕事をする自分自身に向けさせ、彼らには時間内にこなさなければならない業務のような感覚をもたらされていたと考えられる。病棟のルールでやることが決められたシャワー浴の介助では、介助する自分や時間を気にすれば業務のような感覚が生じ、患者を気遣い気持ちよさそうな表情を感じ取りながら介助をすればケアをしている感覚がもたらされることになる。彼らにとって看護実践は、業務とケアとに明確に分けられるものではない蝶番のよう

な両義性をもつ行為として経験されていた。

看護を仕事として担うことで生じる業務としての側面も、看護実践であることには変わりはない。しかしながら、一人前の看護師として認められていないと自覚している彼らにとって、自分が実践していることが患者のケアになっているのか、やらねばならない業務をこなしているだけなのかという問いは、自らの看護師としての存在意義に関わる重要な問いである。彼らは自分たちで問いを立て話し合い、Bさんの語りにおいて看護師という存在了解に辿り着いた。彼らは自分たちが実践していることが看護なのか業務なのかというジレンマについて語り合い、Bさんが語った「その人にとってもっともいい言い方がある」「不安にさせないように」「それは看護師だから」という患者にとってもっともよい仕方に関わろうとする存在が看護師であるという、看護師としての根源的な在り方の理解(池田, 2011, p. 91)に辿り着いた。その言葉は、自分が行う看護がケアか業務なのかを判断することが重要なのではなく、その状況下において患者に関わる看護師としての在り方が重要であるという看護実践者としての存在了解に辿り着いたことになる。しかしそれは取り敢えず業務だからと語っていたBさんに明確に自覚されていたわけではなく、仲間と語り合う中で言語化され了解されたことになる。次項ではその看護師としての存在了解と、彼らに生じた看護実践者としての変容について考察する。

2. 移行期早期の新人看護師に生じた看護実践者としての変容

移行期早期の新人看護師たちが語った看護実践は、輸液管理のために点滴刺入部に挿入日を記載したり、入院患者からチームが看護を実践するときに必要になる情報を聴取したり、手術の同意書類を忘れた患者が不安にならないように振る舞ったり、患者が腹痛を起こさないように下剤を投与したりと、それぞれ状況や内容も異なっていた。しかし看護師として、その状況においてチームの看護を先取りし、その時に受け持った自分ができる患者の看護を実践していることは共通している。それは入職直後やらねばならないケアや業務を時間通りに行わなければならないと必死だったときの看護実践とは、明らかに異なっていた。彼らは看護師となったこの2ヶ月半のあいだに看護チームの一員として臨床で夜勤を経験し、夜勤勤務者や他部署からの申し送りを受け、他部署との連関や自分が勤務していない時間帯の患者や看護師の動きを実態を帯びたものとして認識できるようになっていた。その経験は彼らに患者の療養生活やそれを支えるチームの実践を先取りすることを可能にし、彼らに自分が行う看護実践をチームとしての意味をもつ実践として認識できるようになるという看護実践者としての変容をもたらしていた。

しかし本研究で語られた看護実践は、予期された時間や患者の生活者としての個別性の視点から見ると限局されたものであった。彼らの看護実践者としてのパースペクティブが捉えていたのは、受け持った過去の経験から推察した病いがもたらす苦痛や治療としての輸液管理における感染リスク、内服薬の影響、薬の効果時間の想定といった次の勤務帯や翌日、翌週といった少し先の未来における患者の療養生活上の予期であった。新人看護師は実践経験が限られているために病気がたどる大局的な見地からではなく、直近の日や時に焦点を当てる (Benner, Tanner, Chesla., 2009/2015) という状況は、本研究の移行期早期の新人看護師にもみられたことになる。それ故、彼らに生じたパースペクティブの変容は日々臨床経験を重ねている彼らに、進行形で生じつつあると考えられる。

しかしながら彼らの看護実践には、患者や特定の看護師ではないチームの存在が含み込まれるという変化がみられていた。入職直後の看護実践は、実践者である自分が業務や看護実践を時間内に終わらせるかという一人称の語りで語られたが、2ヶ月半のあいだに「なった」と語られた実践は「患者さん」「夜勤帯」「次の日」「チーム」を含み込んだ語りへと変化していた。このことは彼らがチームの看護師の動きを了解した上で少し先の患者の状態を予測できるようになったことで、彼らが実践する看護が他者との共同性を帯びたものに変化したことを表している。共同実践の場に入ることによって生じた学びはアイデンティティの変容をとまなう(Lave & Wenger., 1991/1993, p. 30) とされるが、彼らに生じた看護の事象を捉えるパースペクティブの変容(Mezirow, 2010/2012, p. 246)は、看護実践者としてのアイデンティティに生じた変容、すなわち看護師としての成長と捉えることができる。

そして前述したように彼らには、看護実践者としての存在了解がみられていた。臨床という常に患者や人が行き交う共同実践の場に入り、先輩看護師やリーダー看護師といったチームの動きとそれに応答する患者の様子を見聞きし、自らもその臨床の状況において看護師としてどう振る舞うべきかを了解できるようになるという変容が彼らに生じていた。看護師になるということは国家試験に合格し、手順を覚え患者の健康問題解決に向けて看護展開ができるようになることだけではない。就職して2ヶ月半のあいだに彼らには、自らが実践する看護実践の意味をチームのパースペクティブで捉え、看護師とは患者にとってどのような存在で在るかを自らの振る舞いを通して認識出来るようになるという看護実践者としての変容が生じつつあることを表わしている。そしてその変容は彼らに、その時々々の看護実践において患者にとってもっともよい仕方に関わる看護実践者としての能動的な振る舞いを可能にし、主体的な看護実践をもたらすことが期待できる。

現在の新人教育は離職防止の観点からも非常に手厚く行われている。序論で述べたように新人看護師の看護実践については、困難やできることに焦点が向けられてきた。大江ら(2014)は、就職半年後の新人看護師は職場コミュニティの一人としての自覚や勤務体制への適応、日常業務に対応できる技術の獲得、できる実感を得ることが職業継続意思の獲得に繋がっていたと報告している。しかし本研究の移行期早期の新人看護師たちからは、技術の獲得や明確なできたという実感ではなく、自分たちの関心が患者やチームを気遣うように変化したことが語られた。このことは自分に生じた変容は自覚されづらく、実践したことを振り返り以前との差異を認識できたときに初めて自らが変わったことに気づくことを表していた。そうであれば、新人看護師が自らに生じた看護実践者としての変容を自己の成長として認識できるような、振り返りの機会が重要になると考えられる。そして新人看護師にはジレンマだけではなく、看護実践者としての変容が生じつつあることを移行期教育に携わる側が認識する必要がある。その上で、移行期教育に関わる者が実践を見せて教授するだけではなく、看護師としての振る舞いの意図も伝えることで看護実践者としての自己理解を促し成長を支援することに繋がることを期待できる。

本研究の限界は、同じ大学を卒業した単独の教育背景をもつ仲間との語りであり、教員である研究者が全員の個別インタビューでの語りを聴いた上で対話に加わったことで、彼らの語りに影響をもたらしたことも否めず、多様な新人看護師の状況を反映できているとは言いがたいことである。本研究では、**Transition Shock**が生じるとされる入職後2ヶ月半の時点に焦点を当てたが、今後はさらに時期や対象を広げて新人看護師の看護実践者として

の変容について探究していく必要があると考える。

謝辞：本研究にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。ご指導いただきました東京都立大学西村ユミ教授、東京女子大学榎原哲也教授、法政大学鈴木智之教授、そして臨床実践の現象学会・駒松研究会でご意見をくださいました皆様に深く感謝申し上げます。

付記：本研究は、首都大学東京大学院（現東京都立大学大学院）人間健康科学研究科に提出した博士論文に加筆修正したものである。本研究に関する利益相反はありません。

引用文献

- Benner, P. (2001/2005). 井部俊子 (訳). ベナー看護論 初心者から達人へ 新訳版. 医学書院: 東京.
- Benner, P., Tanner, C., & Chesla, C. (2009) / 早野ZITO真佐子 (2015). 看護実践における専門性. 医学書院: 東京.
- Duchscher, J. E. (2008). A Process of Becoming: The stage of new nursing graduate professional role transition. *The Journal of Continuing Education in Nursing*, 39 (10), 441-450.
- Duchscher, J. E. (2009). Transition shock: The initial stage of role adaptation for newly graduated registered nurses. *Journal of advanced nursing*, 65 (5), 1103-1113. doi: 10.1111/j.1365-2648.2008.04898.x
- 橋本麻由里 (2018). 新任期にある学士課程卒業者の看護実践経験をもとにした学び. 岐阜県立看護大学紀要. 18(1), 39-50.
- 池口佳子 (2019). 実習経験の振り返りによる 新人看護師の態度に関する現象学的研究. 首都大学東京博士論文.
- 池口佳子 (2023). 振り返られた看護学実習経験の現象学的記述. 日本看護科学会誌. 43 巻, 109-116.
- 池田喬 (2011). ハイデガー存在と行為. 創文社: 東京.
- Lave, J., & Wenger, E. (1991) / 佐伯胖 (1993). 状況に埋め込まれた学習正統的周辺参加. 産業図書: 東京.
- 松葉祥一, 西村ユミ (2014). 現象学的看護研究 理論と分析の実際. 東京: 医学書院.
- 森真由美, 亀岡智美, 定廣和香子, 舟島なをみ (2004). 新人看護師行動の概念化, 看護教育学研究. 13 (1), 51-64.
- Mezirow, J., (2010) / 金澤睦・三輪建二 (2012). 大人の学びと変容: 変容的学習とは何か. 鳳書房: 東京.
- 日本看護協会 (2024). 2023 年病院看護・外来看護実態調査, <chrome-extension://efaidnbmninnnibpcajpegglefindmkaj/https://www.nurse.or.jp/nursing/assets/100.pdf> (参照 2024年6月25日).
- 大江真人, 塚原節子, 長山豊, 西村千恵 (2014). 新卒看護師が職業継続意思を獲得するプロセス. 日本看護科学会誌. 34巻. 217-225.
- 田中広美 (2022). 急性期病院に勤務する新卒看護師が直面する困難と就業継続にむけた支援のありかた. 日本看護学教育学会誌, 32 巻 1 号, 65-77.

谷口初美, 山田美恵子, 内藤知佐子, 内海桃絵, 任和子 (2014). 大卒新人看護師のリアリティ・ショック. 日本看護研究学会雑誌, 37 (2), 71-79.

Abstract

【 Objective 】 This study aimed to phenomenologically describe the dilemmas experienced by novice nurses during the early transitional period and their transformation into practicing nurses.

【 Methods 】 We conducted unstructured group interviews with 6 novice nurses in the early transitional period and analysed the results using a phenomenological approach.

【 Results 】 Novice nurses in the early transitional period experienced dilemmas stemming from their inability to act independently as nurses and their sense of obligation felt during nursing practice. Through discussions with their peers, they gradually understood that nurses are professionals who engage with patients in the best possible way. Their mindsets also changed based on discussions about their practice. They developed the ability to cooperate, which allowed them to anticipate their team's intentions.

【 Conclusion 】 The perspectives of novice nurses changed in the early transitional period, enabling them to anticipate their team's intentions, reflecting their development as practicing nurses.

KeyWord: novice nurse, transformation, nursing practice, Phenomenology

要 旨

【 目 的 】 移行期早期の新人看護師たちが感じたジレンマと、彼らに生じた看護実践者としての変容を記述する。

【 方 法 】 移行期早期の新人看護師6名に非構造化グループ面接を実施し、現象学的に記述した。

【 結 果 】 移行期早期の新人看護師たちは、看護師として主体的に実践できないジレンマや実践する看護を業務のように感じられるというジレンマを感じていた。しかし、彼らは仲間との会話を通じて、看護師とは患者に不安を与えないように振舞う存在であると了解していった。彼らが語った実践には、チームが意図することを先取りできるようになるという共同性が含み込まれるようになる変化が生じていた。

【 結 論 】 移行期早期の新人看護師たちには、チームの意図することを先取りするパースペクティブの変容が生じていたが、それは看護実践者としての彼らの変容を現わしていた。

キーワード: 新人看護師, 変容, 看護実践, 現象学